

与謝野晶子『舞姫』評釈

佐藤

与謝野晶子『舞姫』評釈

佐藤 和夫

校閲 武田寅雄

国文学研究叢書

明治書院

著者略歴

1938年1月，東京に生まれる。

1967年3月，立教大学大学院博士課程終了。

専攻は日本近代文学。

現在，松蔭女子学院大学講師。

著 書

「与謝野晶子全歌集総索引・附解題・晶子と
その歌風」（共著）



国文学研究叢書



与謝野晶子『舞姫』評釈

定価 2,400円

昭和53年9月25日 印刷

昭和53年10月5日 発行

著 者 佐藤和夫

発行者 株式会社明治書院

代表者 三樹彰

印刷者 大文堂印刷株式会社

代表者 梶原忠幸

製本所 浦野製本



発行所 株式会社 明治書院

東京都千代田区神田錦町1—16

郵便番号 101

電話 東京 (03)292—3741(代)

振替口座 東京 3-4991番

©1978 Kazuo Satoh 3392-24916-8305

『舞姫』 解題

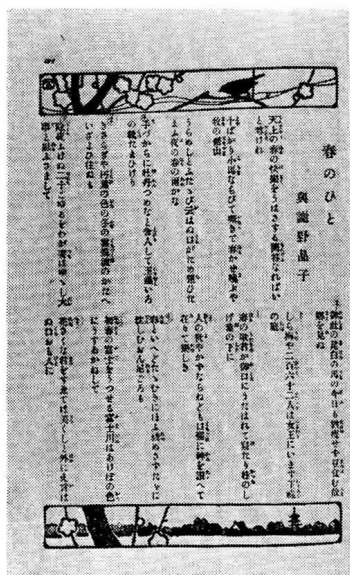


『舞姫』表紙

『舞姫』は明治三十九年一月一日、如山堂書店（東京）から刊行された。体裁は三六判布装で定価七十銭である。百五十二頁（一頁に二首、最初と最後の頁のみ一首）で合計三百二首が収められている。

装幀・挿画（「舞姫」——外装画、「舞姫」——表紙画、「京の清水——挿画」）は中沢弘光である。口絵の「京の清水」は三色刷である。巻頭に、「西の京三本樹のお愛様にこのひと巻をまゐらせ候（あき）」とある。

二版・明治三十九年三月、如山堂書店刊。

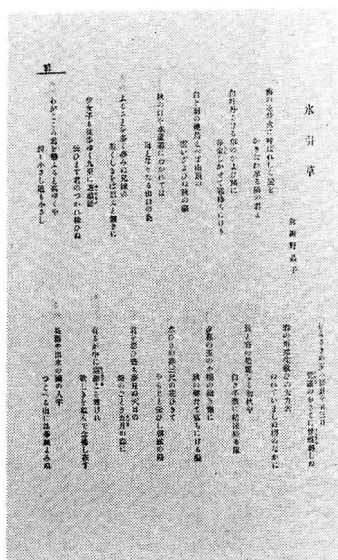


『帝国画報』表紙と晶子「春のひと」掲載ページ

三版・明治三十九年三月、如山堂書店刊。
四版・明治四十四年十月、如山堂書店刊。

『舞姫』の内容は明治三十八年一月から十二月の『明星』誌上に発表したものがその大部分であるが、その他『太陽』（明治三十八年九月―夕舟）、『帝国画報』（明治三十八年十一月―水引草）、『中学世界』（明治三十九年一月―春のひと）、『芸苑』（明治三十九年二月―耳無草）であるが、このうち『明星』と重出しているものもある。その他、初出誌不明の歌が十三首ある。

明治三十四年八月処女歌集『みだれ髪』を鳳晶子の名で刊行し、世間の注目を一身に集めた与謝野にとっては第五番目の歌集であり、すでに二子の母親で年齢も二十八歳の時の作品である。当時の心境を自ら回想して次



『中学世界』表紙と晶子「水引草」掲載ページ

のように述べている。

三十八年と云ふ年は、わたくしの二十八才に当るのである。わたくしの物質生活が極めて貧困であつた時代で、わたくしは外出着に冬は一枚の銘仙の羽織と、夏は縮の浴衣が一枚あつただけである。併しわたくしは、さう云ふ中で歌の三昧に入つてしまふと、何事も忘れることの出来た幸福な時代であつた。わたくしが外出着を夏冬一着より持たないと云ふ理由としては、極端に貧困である外に、歌の三昧に入ると、誰にでも自分の持物を与へてしまひたくなる悪癖が盛んであつたことを、わたくしは思ひ出すのである。(『現代短歌全集』)

経済的にめぐまれない環境の中で自己の芸術に没頭した晶子の姿が如実に語られてい

舞姫

與謝野晶子著

うたたねの夢路に人の逢ひにこし進歩のあと
を思ふ雨かな

『舞姫』本文第一ページ

る。

舞姫の語は晶子の歌の随所に見られるが少女時代より『源氏物語』をはじめとして、その他多くの古典文学になれ親しんでいた晶子にとって、王朝生活をしのばせる、きらびやかさ、幻想の中を飛らいする蝶のよ

うな美しさを連想させる舞姫への限らない憧憬を示すものである。

『半秋』^{〔注〕}の第一号に「舞姫」（和歌）と題して十七首発表し、第二号にも「春夢」（和歌・新詩社詠草）と題して十首発表しているがこれらの中から『舞姫』には一首も採られていない。

狂ひの子われに焰の趣かるき百三十里あわただしの旅（みだれ髪）

に見られるような自分の感情を生にうたいあげるのではなく、自己を客観的に見つめた歌や味わいのあるすぐれた叙景歌も多く一段と歌の境地への深みが感じられると同時に、

ゆるしたまへ二人を恋ふと君泣くや聖母にあらぬおのれの前に



『舞姫』口絵「京の清水」

と鉄幹との愛に苦しんだ晶子の姿もとらえることができるのが『舞姫』の世界である。

われと燃え情火環に身を捲きぬ心はいづら行方知らずも

木蓮の落花ひろひてみほとけの指とおもひぬ十二の智円

松かげの藤ちる雨に山越えて夏花使野を馳すらむか

たたかひは見じと目とづる白塔に西日しぐれぬ人死ぬ夕

岡の家瑠璃すむ秋の空の声たてゝ幾ひら桐おちにけり
 夏のかぜ山よりきたり三百の牧の若馬耳ふかれけり
 誰れが子を殯におくる銅拍子ぞ秋の日あびて一列白き
 君を見て昨日に似たる恋しさをおぼえさせずば神よ咀はむ
 舞姫のかたちと誉めよむかしの絵そへ髪たかく結ひたる人を
 人妻は高き名えたる黒髪のうしろを見せて戸にかくれけり
 頬に寒き涙つたふに言葉のみ華やぐ人を忘れたまふな
 半身にうすくれなるの羅のころもまとひて月見ると言へ

〔注〕

『半秋』（第壹号）明治三十四年一月二日印刷、同三十四年一月五日発行。

発行人兼編輯人―長崎市本籠町十一番戸 南木芳太郎。

印刷人―長崎市今鍛冶屋町三十三番戸 朝川寛十郎。

発行所―長崎市本籠町十一番戸 半秋会。

この号に与謝野晶子は鳳晶子の名で「舞姫」と題して十七首発表しているが、そのうち十一首が『みだれ髪』に採られている。これらの歌は『明星』（明治三十四年一月）と重出である。他に『火の鳥』に一首採られている

が他は不明である。

『半秋』（第貳号）明治三十四年二月二日印刷、同三十四年二月五日発行。

発行人兼編輯人―長崎市馬場二十一番戸 鎌田清治。

印刷人・発行所は一号に同じである。

この号に与謝野晶子は鳳晶子の名で「春夢」（和歌）と題して十首発表している。そのうち『みだれ髪』に四首採られているが、これらの歌は『明星』（明治三十四年三月）と重出である。残りの六首は不明である。

もくじ

『舞姫』 解題	7
『舞姫』 評釈本文	1
与謝野晶子歌集解題	169
『舞姫』 全句索引	197
あとがき	217

1 うたたねの夢路に人の逢ひにこし蓮歩のあとを思ふ雨かな

〔初出〕 『明星』三十八年六月―はなたちばな

〔語釈〕 夢路―夢に見ること。蓮歩―〔南史齊東昏侯紀〕（支那南齊の東侯が潘妃に金製の蓮歩の上を歩かせたという故事に基づく）ここでは美人の歩きかた。金蓮歩。

〔口釈〕 うたたねをしている夫の夢路に、私以外の誰かが逢いに来たにちがいない、ふと目覚めた夫が雨の中にそのうしろ姿を見送るような表情でぼんやりとしている。私にそんな空想を起こさせる春の雨である。

〔参考〕 うたたねから、ふと目覚め、外にぼんやりと目をやるとしとと春雨が降っている、そんな情景が作者に一種の幻想を想起させたのであろう。「思ふ雨かな」は艶な情緒をかもし出している。作者自身の気持を率直に詠んだと解すれば、共に苦しい恋を経験し、それを成就してもなお、多情さを捨て切れない夫への空しい抗議と考えられないこともない。

2 美しくしき女ぬすまむ変化もの来よとばかりにさうぞきにけり

〔初出〕 『明星』三十八年四月―春月集

〔語釈〕 変化―妖怪。動物などが姿をかえてあらわれること。化物。さうぞき―「装束く」装う。着飾る。

〔口訳〕 美しい娘ばかりを狙って攫ってゆく妖怪よ、さあおいでと言わんばかりに私は誰よりも美しく着飾った。

〔参考〕 美しく装った女心を巧みに表わした一首である。この歌について、坂本政親は、

女を盗むという発想は、正岡子規の「酈夜や女盗まんはかりごと」(『寒山落木』)に類似している。(『日本

近代文学大系』17・与謝野晶子集・昭和四十六年二月・角川書店刊)

と指摘している。

3 家七室霧にみなかす初秋を山の素湯めで来しやまろうど

〔初出〕 『明星』三十八年五月―ゆく春

〔語釈〕 まろうど―「客人・賓」(まれびとの意。よそから尋ねてきた人。客。

〔口訳〕 時は初秋、この山の宿には客室が七間ある。どの部屋も客の姿はなく、山霧だけが通りぬけている。紅葉にはまだ早く何の風情もないこの宿に、たださらさらとした出湯のよさだけをめでにおいでになったのですか。

〔参考〕 紅葉にはまだ早い静かな山の湯の情景を巧みに詠んだものである。窪田空穂がこの歌を、

初秋、山には霧の深いところ、山の温泉へ行ったら、そこは夏季を主とした温泉と見え、室はガランとして客がゐなかつた。それが快かつたと見える。

この歌は宿の主人が挨拶に来て、歌をもつて挨拶した形のものである。人に代つて歌を詠むといふ形、殊に挨拶の口上を歌をもつて云ふことは、古典の中には限りなくあるもので晶子はそれに倣つてしてゐるのである。口上はすべて晶子自身の心である。この歌で注意する一法として、眼の前にある対象を借りて、それを写すことによつて自身を現はすことである。この歌は、外形としては人に代つてといふ古いものであるが、主人に云はせてゐることは、すべてその宿で自身の快く思つたことで、それによつて山の湯の快い気分を出してゐるのである。「家七室霧にみなかす初秋」は、詩人らしい、味ひのある捉へ方である。（短歌文学読本『与謝野晶子』昭和二十五年十一月、雄鶏社刊）

と評しているのは、まさに作者の歌の心を深く理解していると言えよう。

4 恋はるとやすまじきものの物懲にみだれはててし髪にやはあらぬ

〔初出〕 『明星』三十八年五月―ゆく春

〔語釈〕 すまじき―するまい。したくない。物懲―ものごとにとりること。

〔口釈〕 どんなに慕われようと、恋はもはや決してすまいという後悔に髪も乱れ乱れて、「いまの私には恋愛の情を受け入れる余裕」もないのに、そんな私をなお、恋い慕うとおっしゃるのですか。

〔参考〕 恋の苦しみを切々と訴えているがなお、それを断ち切れずにいる気持を「みだれはててし」に表象したものである。

5 船酔ふな酔ひはいとわかやかにまるねしぬ旅たびあきうどと我われとのなかに

〔初出〕 『明星』三十八年五月―春月集

〔語釈〕 まろね―着物を着たまま寝ること。

〔口釈〕 偶然にも同船した旅商人と、横になって、のどかな春の川景色を眺めながらの船旅はいつしか船酔いにも似た若々しい感情が漂ってくるのであった。

〔参考〕 この場の情景から恋でもめばえそいうな華やいた気分を詠んだものであり、物語的構成を持った一首である。

6 白百合しろゆりのしろき畑はたけのうへわたる青鷺あなざぎづれのをかしき夕ゆふべ

〔初出〕 『明星』三十八年六月―はなたちばな

〔語釈〕 青鷺―「さぎ」の一種。大形で後頭に青ばんだ灰色の一本の長い毛がある。沼地に住み集団で大木に営巢する。夏の季語。

〔口釈〕 白百合の咲く、一面に白い畑の上を、ゆうゆうと羽ばたきながら夕風に連れだって飛んで行く青鷺の美しい姿は、夕暮れに一層の趣を添えた。

〔参考〕 夕暮に白々と映える白百合の畑の上を青鷺がうち連れて飛び去って行く、地上の白と空を行く白の群の対照の面白さを詠んだものであらう。

？ わかき日のやむごとなさ^ひは王城のごとしと知りぬ流離^{わうりやう}の国^{くに}に

〔初出〕 『明星』三十八年十一月—新詩社詠草・その壺

〔語釈〕 やむごとなさ—ひととおりでないこと。非常に尊いこと。高貴なこと。

〔口釈〕 放浪の果ての今から思うと、若き日の心の貴さは王城に住んでいるような誇り高いものであった。

〔参考〕 ままならぬ現在の身の上を思うにつけ純粹であった過ぎし日の青春時代に思いを馳せ、懐しんでいるのであらう。この時期の作者の心の一端を垣間見たような気がする一首である。「流離の国」、「王城」について作者は、自ら「藪柑子」三（『明星』明治三十九年七月）の中で、

蒲原先生が、むかし、藤村様の「落梅集」の中で一番佳いと思ふのは「椰子の実」だとお云ひに成りましたので、私もそれを読んで居りますと、藤村様の何よりもそれが好になりまして、「新なり流離のうれひ」と常に口に致しますやうになり、流離の人の悲しさがつくづく身に沁むやうになりました、それから衰へた人の思は斯うでは無からうかと思ひましたので御座います。それにもう一つ斯う云ふお話があるので。私の伯母さんの郷里はと問ひますとね、私は王城の生れと申します。今も申して居ることでせうが、その「王城」と云ふことばの中に、さまざまの意味、恰も「ありし日の驕楽の追憶」とでもむつかしく云へば云はれ

るやうなことがあるやうに、私には聞えるのでした。
と述べている。

8 歌うたを見てうみつみばみ柱しらに秋雨あきさめのつたふやうなる涙なみだの落ちぬ

〔初出〕 『明星』三十八年十一月—新詩社詠草・その壱

〔校異〕 涙の落ちぬ—涙し落ちぬ（『明星』）

〔語釈〕 うみつみばみ柱しら—空柱。中がうつるな柱の意味で、清涼殿の南、神仏門の西にある箱形の雨樋。ここでは雨樋の意味。「うつば柱より内、鈴の綱の辺に……」（『平家物語』卷一「殿上聞討」）など有名である。

〔口釈〕 私は恋人の詠んだ歌を見て、恋人の心が誰か他の女性にひかれていることを知り、雨樋いに冷たい秋雨がどつと流れ落ちるように涙がとめどなく頬をつたって流れた。

〔参考〕 「私がこんなにあなたをお慕っていますのに、どうしてこの気持が通じないのでしょうか」という気持を作者が平安朝の女性に扮して詠んだものである。恋人の歌を見てその本心を知るという処など王朝趣味が横溢している。

9 日輪にちりんに礼拝らいはいしたる獅子王ししおうの威ゐとぞたたへむうらわかき君きみ